学術欄

文学・物語と言語
―言葉の魅力に導かれて―

前 薬学部 薬学基礎教育センター 第２英語研究室　教授　大野　真

私は薬学部の第２英語研究室という研究室に所属し、30年以上にわたって、薬学部での英語教育を担当し、また、文学や言語についての研究を行ってきました。今までの経験を振り返りながら、「言葉」という観点から総括していきたいと思います。

１．薬学部での英語教育

私が本学の専任講師として着任したのは1992年のことでした。当時、第１英語研究室には斎田誠一先生が、第２英語研究室には酒井格先生がおられ、私は酒井先生の後任として採用されました。30年以上前に初めて本学のキャンパスを訪れた時のことを不思議な感慨をもって思い出します。まだ生命科学部ができる前のことでした。もちろん、薬学部も４年制の時代です。私も30歳頃で若かったので、学生ともずいぶん親近感をもって接していたように思います。

理科系の大学ということで、授業のテキストにも、なるべく科学的な話題のものを選ぶように心掛けました。具体的には、SF作家で生化学者でもあるアイザック・アシモフのエッセイや、ブロノフスキーの科学史の抜粋、さらに、様々な原書（環境ホルモンやデザイナー・ベイビーを扱ったもの）などです。科学的とは言っても、文科系の人間にも興味がわくような内容で、文系と理系の橋渡しになるようにと思っていたのかもしれません。経済学の研究室におられた蔵本喜久先生たちと一緒にアメリカの医薬品研究開発についての本の翻訳を手掛けたことも、良い勉強になりました。

環境問題を扱った古典である、レイチェル・カーソンの『サイレント・スプリング（沈黙の春）』については、第４英語研究室の森本信子先生と一緒に英文読解のテキストを作成しました[1)]。殺虫剤等の乱用に対して警告を発した『沈黙の春』は、環境問題への意識を高めるうえで多大な影響を世界に与えた書物ですが、作者のカーソンは科学的知識と文学的感性の豊かさの両方を併せ持ち、英文読解のテキストとして優れていると思いました。なお、このテキストには、レイチェル・カーソン日本協会会長で、東京薬科大学１回卒の上遠恵子先生から巻頭の挨拶の文章を頂き、感謝申し上げます。

ちなみに、環境問題を考える手がかりとしての文学の研究は「エコクリティシズム」として注目されており、カーソン以外にも、森の中の簡素な小屋で生活しながら自然や人間について深い思索を行ったヘンリー・D・ソロー『森の生活』や、水俣病を扱った石牟礼道子『苦界浄土』など、様々な作品が新たな視点で研究されています[2)]。

さて、薬学部での英語教育の方に話を戻しますと、この数年間の英語教育では精読と多読との組み合わせを行ってきました。精読については、医療や薬学関連の話題の英語の文章を、文法や構文をしっかりと理解した上で着実に読み取ることに重点を置いています。

一方、多読については、図書館に、易しい英文で書かれた多読用のテキストが沢山備えてあるので、その中から学生が自分の好きなものを選び、授業中の最初の15分間に集中して読む方式です。精読の方は細かいところにも注意して読みますが、多読の方は大まかな理解でいいので沢山読み、気軽に楽しく英文に親しむことが目的です。学生の選ぶ多読用のテキストを見ると、事実に基づいたテキスト（日本の紹介記事など）もありますが、『不思議の国のアリス』や『ガリバー旅行記』、『ロビンソン・クルーソー』、映画の原作など、「物語」系のテキストも多いです。薬学という科学を学んでいる学生たちが、物語を通じて英語を楽しく学んでいることを興味深く感じました。なお、多読したテキストについて、毎回の授業中に学生に短いコメントを書いてもらうのですが、2～3行の文の中でテキストの雰囲気が伝わるような面白い感想を書いてくれる学生が多く、短い形式の中で事物の真髄を表現する日本の俳句の伝統がこんなところにも生きているのかなあ、などと思ったりもしました。

英文読解についての話が多くなってしまいましたが、薬学部の英語教育では、早くから「英語聴文」という科目でリスニングの訓練を取り入れ、その科目は後に「英語コミュニケーション」という形で発展していきました。また、授業中に英語の歌の書き取りをしたり、ビートルズの曲についてのゼミナールをしたことも楽しい思い出です。英語の歌は学生も喜んでくれたのですが、私自身もいろいろな曲の歌詞を覚え、それらの曲を何かの機会で耳にすると大変懐かしいです。

薬学部の英語科目も新カリキュラムに移行し、今後は、新しく発足した言語教育研究センターが、薬学部と生命科学部の両方を踏まえた視点から英語教育に取り組み、発展させてくれることでしょう。

2. 文学と言語の研究

さて、英語教育の傍ら、私自身はアメリカ文学を中心とした文学の研究をしてきました。とくに、ウィリアム・フォークナーという20世紀のアメリカの作家に興味を持っています。フォークナーは、アメリカ南部の作家ですが、南北戦争や人種差別などの問題に真摯に向かい合い、物語中の斬新な時間処理などの現代的技法を駆使しつつ、一連の作品を通して、多様で魅力的な人物たちが登場する大きな作品世界を築きました。アメリカ南部を描きながらも、その作品は苦悩の中を生き抜く人間の心に訴える普遍的な価値をもち、1949年のノーベル文学賞を受賞しています。日本の作家にも大きな影響を与え、例えば、大江健三郎や中上健次などは、フォークナーを意識しつつ、自らの故郷を舞台にした優れた作品群を書いています。

一方、私はフォークナーの作品と並行して、ハードボイルド的な小説（ヘミングウェイやハードボイルド探偵小説）にも興味を持っていました。留学先のヴァージニア大学でダグラス・デイ先生のフォークナーについての授業を聴講していた際に、「フォークナーはハードボイルド探偵小説から大きな影響を受けているが、この分野はまだ研究がなされていない」との指摘があったのをきっかけに、本格的に両者の関係を研究してみる気になり、帰国後にその成果をアメリカ文学会で発表し、続いて『ユリイカ』のフォークナー特集号にも掲載しました[3)]。その後もフォークナーの研究を続けるとともに、フォークナーと関連のある南部の女性作家や、フォークナーの同時代人であるF・スコット・フィッツジェラルド、ハードボイルド探偵小説作家であるレイモンド・チャンドラーなどの作品を扱った論文を書いています[4~7)]。ちなみに、フィッツジェラルドやチャンドラーは、村上春樹が好んだ作家であり、村上春樹が代表作を自ら翻訳しています。

このように様々な文学作品を研究してきて、この年齢になってあらためて感じることは、

なぜ小説や物語が人々の心を動かすのかという不思議さです。英語の授業でも学生が様々な物語を楽しんで読んでいましたが、さらに進んで、小説や物語には、想像上の産物であるにもかかわらず、人々が生きていく際の悩みや苦しみを癒し和らげる作用があります。文学作品に限らず、「物語」を広く解釈して、映画やテレビドラマ、漫画でも同じことです。考えてみると、私たち自身も、物理化学的な法則の支配する世界にいながら、各々が自分たち自身の「人生」という一種の物語を作り上げながら生きているのです。

この点で参考になるのは、心理学者の河合隼雄の著作で、河合は多くのクライエントと接した臨床体験を基に、人間の心を全体的にとらえるうえで「物語」が果たす役割の大きさに注目しています。また、日本の神話や民話を分析し、西洋のものとの比較を通じて、そこに表れている日本人の精神構造を明らかにしています[8)]。

さて、文学の研究を進めるとともに、私にとって徐々に重要性を増してきたのが言語についての哲学です。授業においては標準的な学校文法を軸にして教えますが、さらに深く言葉の成り立ちについて考えてみたくなったのです。とくに、英米系の哲学者であるA・N・ホワイトヘッドやバートランド・ラッセルの思想に興味を持ちました。この二人は『数学原理』（1910年～13年）という書物で現代的な記号論理学を確立しましたが、その後にそれぞれが独自の魅力的な思想を展開しました。ホワイトヘッドは『象徴作用』という本で、言語と様々な社会の関係について広い観点から考察しています[9)]。また、ラッセルは「指示について」という論文において提唱した「記述の理論」で、20世紀の言語哲学に大きな影響を与えましたが、想像上の文学作品を扱う上でもその思想は有益であると私は思っています[10)]。なお、昨年12月に愛犬が亡くなったことをきっかけに、動物好きの養老孟司先生の本をいろいろと読みましたが、『遺言。』という著作では、動物と人間の認識能力の違いに注目して、人間の言語や文明の成立に至る過程が考察されていて、興味深く思いました[11)]。

3. お礼の言葉

最後になりましたが、私は本年3月末日をもって本学を早期退職しました。本学教職員や学生・卒業生の皆様には本当にお世話になり、支えて頂き、心より感謝申し上げます。今後も、まずは健康に注意しながら、物語や言語についての研究を自分なりに続けていきたいと思っています。

（2025年2月執筆）

参考文献

1）大野真・森本信子『英語で読む　レイチェル・カーソン「サイレント・スプリング」』東京薬科大学出版会、2014年.

2）結城正美『文学は地球を想像する―エコクリティシズムの挑戦』岩波書店、2023年.

3）大野真「フォークナーとハードボイルド探偵小説」『ユリイカ』29.15（1997）：192-98.

4）大野真「ミステリーの中でのフォークナー」『フォークナー』13（2011）：69-83.

5）大野真「限定された円の機能―『デルタの結婚式』再考」『アメリカ文学ミレニアム―〔Ⅱ〕』國重純二編、南雲堂、2001年、180-95.

6）大野真「フィッツジェラルド『夜はやさし』での役割論」『東京薬科大学研究紀要』20（2017）：9-17.

7）大野真「ハードボイルド探偵小説と喪失の危機―レイモンド・チャンドラー『長いお別れ』論―」『東京薬科大学研究紀要』28（2025）.

8）河合隼雄『神話と日本人の心』岩波書店、2003年.

9）大野真「ホワイトヘッドの記号／象徴論」『東京薬科大学研究紀要』2（1999）：9-25.

10）大野真「バートランド・ラッセルの言語観」『東京薬科大学研究紀要』23（2020）：15-22.
＊論説資料保存会『英語学論説資料』55（2021年分）の第1分冊にも掲載

11）養老孟司『遺言。』新潮社、2017年.